

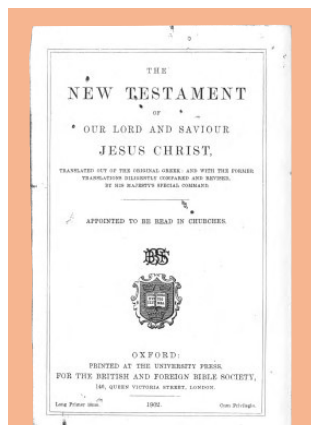
世を去るまで枕頭にあった

芥川龍之介の聖書

鈴木範久 すずきのりひさ 立教大学名誉教授

芥川とキリスト教

聖路加国際病院の一角に、芥川龍之介の生誕の地であることを示す記念碑が建てられている。芥川は一八九二（明治二五）年、その地で牛乳業耕牧舎を営んでいた新原敏



芥川が用いた聖書『The New Testament』（オックスフォード版）日本近代文学館 所蔵

三・フクの長男として生まれた。芥川は、生まれてすぐに、赤ん坊が丈夫に育つための風習にしたがい、近くの教会の前に捨てられた。もちろん儀式であるから、直ちに拾われた。周りは外国人の居留地であったため、教会はいくつかあった。もしかすると聖公会の聖三一教会かもしれない。そうすると、妙な関係にせよ、芥川とキリスト教との最初の出会いになる。

一九一〇（明治四三）年、芥川は第一高等学校に入学する。校長はキリスト者の新渡戸稲造であり、当時の一高には宗教的雰囲気色が濃く漂っていた。同期入学者の中に矢内原忠雄、三谷隆信、倉田百三らがいる。同じく同期の井川（恒藤）恭から芥

川は一冊の英文新約聖書を贈られた。一九〇二年刊行のオックスフォード版の『The New Testament』であり、表紙の裏に「一高在学中井川君より贈らる」と記されている。井川は、ドイツ人宣教師の経営する学生寮にいたようである。

その後、作家になってからの芥川は、キリシタンを題材とした作品を少なからず発表する。これらの中には殉教談や聖人伝によったものもあるが、日本人のキリスト教受容の面の上での鋭い文明批評がみられる。しかし、しだいに芥川の関心はキリストに注がれていく。

聖書販売人室賀文武

芥川と聖書との関係を語るとき欠かせな

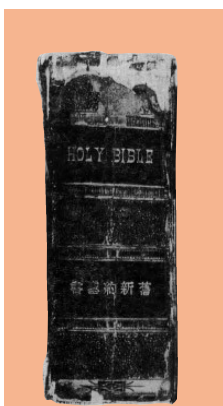
い人物に室賀文武がいる。芥川の父が営んでいた耕牧舎で働いていて、幼児の芥川をかわいがった。芥川より二十三歳年長であるから、親子ほどの年の違いがあった。芥川の一高時代に二人は再会。しばらくして室賀が自選句集『春城句集』に序文を寄せた。

行商生活をへて米国聖書協会に雇われていた室賀は、内村鑑三の聖書研究会にも出席していた。室賀の回想によると、室賀は内村の著書を芥川のところへ持っていくようになった。ある日、内村の『感想十年』を読んだ芥川は、もっと早く内村について学ぶべきであったと残念がった。一九二六年に聖書も贈ると、さっそく「山上の垂訓」のところを読んでいる。聖書協会の一室に

住んでいた室賀を、芥川をたびたび訪問している。そのことは、作品の「蘭車」でうかがわれる。芥川は室賀を敬愛していた。

遺された聖書

芥川自身が用い、今日まで遺されている聖書は二冊あり、い



芥川が用いた聖書『旧新約聖書』（明治元訳）日本近代文学館 所蔵

気づかれることが少なくないが、ここではひとつだけ指摘したい。朱線部分で示すと、次の文章である（カッコ内はマタイ伝の章節）。

イエス頓て手を伸之を執て曰けるは信仰うすき者よ何ぞ疑ふや（一四・三二）
然ど我なんぢらに告んエリヤは既に来しに人これを知ずただ意の任に彼を待へり此の如く人の子もまた彼等より苦難を受べし（二七・一二）
夫ヨハネ義道をもて来りしに爾曹これを信ぜず税吏娼妓は之を信じたり爾曹これを見てなほ悔改めず彼を信ぜざりき（二一・三二）

世におけるキリストの孤独、寂寥に芥川が強く惹かれていたような気がしてならぬ。

※『旧新約聖書』1000部増刷されたという意。



©日本近代文学館

日本語訳聖書は、世を去ったとき枕元に置かれていた『旧新約聖書』（米国聖書会社、「大正三年一月八日刊、大正五年四月二〇〇〇」明治元訳）である。「西方の人」執筆のため前日まで用いていた聖書とされている。これにも、マタイ伝を中心として十数箇所及ぶ朱線をみることができる。

これを「西方の人」と比較して